

隠喩の解釈理論

- デイヴィドソンを手がかりに -

小林 稔幸

隠喩は、直接的な言語作用とは違い、言葉が本来持っていない筈の意味を持つようにふるまう作用であるが、それにもかかわらず日常において我々が隠喩という通常とは異なる言語作用を理解し、使用することについて、筆者は疑問を持った。

既存の様々な隠喩理論について調べ、その特徴及び批判点についてまとめた結果、既存の理論にはどれも、その示す意味について混乱や、根本的な混乱があるということがわかった。それは多くが、隠喩の持つ意味に対して、それがもたらす効果と意味の領域の規定に失敗していたり、隠喩というものをあまりに特別視し過ぎて、言語作用の一例に過ぎないということをお忘れ、あるいは気づかないということによって起こる問題だった。

しかし隠喩の示す意味をその隠喩表現自体の中のみ見出すという、特徴的な隠喩の構造のとらえ方をしているデイヴィドソンの隠喩理論は、明快で、字義通りの意味以上に確かなものはないとするその考えは、隠喩の理解をする上での基盤として大きな価値がある。デイヴィドソンの理論には、明快であるがゆえに個別の事例しかうまく扱うことができないという批判は存在してはいないものの、それはデイヴィドソンが隠喩をあくまでも言語の複数あるうちの形態として取り扱っているがゆえであり、この批判は的外れである。

では、デイヴィドソンによる隠喩の解釈の過程を、順を追って説明すると、ある文が成され、その文は字義通りの意味で真または偽であり、彼の理論によれば、隠喩である以上それは必ず字義通りの意味として偽となる（あるいは偽とみなされる）。偽であるとみなされた文は、解釈者によって隠喩であるとみなされその隠喩の持つ隠された含意に目を向けさせるように促す。そしてこの隠された含意というものは、隠喩によって我々が気づかされるとある事実であるが、それはあくまでも隠喩が気づかせるものであって、その隠喩自体がそのある事実を直接表してはいない。なお、この場合の気づかされる事実もまた、必ずしも命題的な性質を持つわけではない、ということになる。

筆者は「音楽神が、逃げていく」や、「男は犬である」という隠喩文をもとに、デイヴィドソンの隠喩理論がどのように日常の言語作用を解釈しうるかを示した。

あくまで隠喩理論は一つの言語作用にとして個別に対処すべきものであり、その意味は常に実践的に生まれるというデイヴィドソンの考えを、筆者は支持する。彼の隠喩理論は、あくまで数多ある言語作用の中の一つである隠喩という領域を相手取る上で、重要な役割を果たす理論である。

(指導教員 横山幹子)